県営圃場整備矢吹地区土地改良事業
埋蔵文化財発掘調査報告書

中畑行馬（やらい）遺跡

矢吹町文化財調査報告書 第2集

昭和50年10月

矢吹町・矢吹町教育委員会

行馬遺跡の発掘について

河川が、文化の発祥の源泉であることは、洋の東西を問わないところである。

我が泉川も、本流阿武隈の支流として、古代より住民の居住地であり、大和を中心とした文化の北進と共にひらけたことはあきらかである。その例として、農林省の補助による農耕地の整備事業である泉川、河川改修に伴う遺跡の発掘調査は、昭和４６年３月２０日から２２日の３日間、現須賀川市立博物館主任永山倉造先生の指導の下に進められ、この地帯は、古く奈良時代の集落であったことが判明した。出土品の中に、高杯（祭祀用）や生活用品のつぼ類が相当数にのぼっている。

このことは、大和文化の北進につれ白河軍団とのかかわりが考えられる。古きをたずねて新らしきを知ることはよりよく郷土を理解することで、無言のうちに愛町精神の涵養にもなるわけで、この意義ある文献を心から喜ぶものである。

教育長　小　林　重　孝

目　　次

第1章　付近の遺跡 …… 1

第2章　調査経過 …… 2

第3章　遺　　構 …… 2

第4章　遺　　物 …… 3

第5章　考　　察 …… 6

総　　括 …… 7

写　　真 …… 8

行馬（やらい）遺跡

所在地　福島県西白河郡矢吹町大字中畑字根宿43番地
時代・種類　奈良時代　集落跡
調査主体　矢吹町教育委員会・福島県
担当者　須賀川市守谷館55　永山倉造
調査員　岩田敏之・有我幸一・星圭之助
協力機関　阿武隈考古学研究会・矢吹地区土地改良区・根宿区
調査期間　昭和46年3月20日～22日　3日間

第1章　付近の遺跡

番号	名称	所在地	遺物	地目	備考
1	寺山遺跡	松倉字申久保	墨書銘土器	畑	発掘調査　45.12.15
2	太子堂遺跡	中畑字太子堂	墨書銘土器	〃	
3	森郭遺跡	中畑字森郭	鉄器刀子・紡垂車・土師	〃	発掘調査　47.12.23
4	下荒具遺跡	中畑字中畑	土師・須恵	〃	〃　48. 3.10
5	かに沢遺跡	中畑字かに沢	瓦窯跡・工房跡	〃	〃　48. 3. 1
6	国神遺跡	中畑字国神	土師・土製曲玉	〃	〃　48. 3.
7	三峯森遺跡	大和久字三峯森	土師器	〃	〃　45. 5. 7
8	堰ノ上遺跡	大和久字堰ノ上	〃	〃	〃　45. 5. 7
9	井戸尻遺跡	大和久字井戸尻	〃	〃	〃　45. 6. 5
10	狐石遺跡	大和久字狐石	土師・墨書銘土器	〃	〃　45. 6. 5
11	新池原遺跡	松倉字新池原	土師散布地	〃	
12	芹沢遺跡	柿之内字芹沢	〃	〃	
13	北田遺跡	柿之内字北田	〃	〃	
14	古館遺跡	三城目字古館	〃	〃	館跡
15	本城館遺跡	三城目字本城館	〃	〃	
16	岡ノ内遺跡	神田字岡ノ内	〃	〃	
17	笹目平遺跡	大和久字笹目平	〃	〃	
18	山王遺跡	大和久字笹目平	〃	〃	
19	上ノ原遺跡	柿之内字上ノ原	〃	〃	
20	乙江沢遺跡	明新字乙江沢	〃	〃	
21	屋敷前遺跡	明新字屋敷前	〃	〃	
22	吉作遺跡	三城目字吉作	〃	〃	

第２章　調査経過

県営矢吹地区圃場整備事業の実施に当って、この行場遺跡が事業地域に入ることが明らかになってきたので今回の調査となった。この遺跡はさきに畑の耕作中に住居跡の竈と思われる遺構が発見され、長甕が２点出土したことがある。このため調査が実施されることとなった。

昭和46年3月20日矢吹町教育委員会を調査主体として地元根宿の人々の協力によって調査が開始されることとなった。

遺跡のほぼ中央に巾２ｍ×長さ20ｍのトレンチＡ・Ｂを設定し荒掘りを行う。この地域は矢吹ヶ原の中心部で、春のからっ風が強く作業は難行する。Ａトレンチに土器が発見され始める。

21日は朝から晴天で快適に作業を進めることが出来る。今日は彼岸の中日であるが、部落の人々は進んで参加する。

前日に続いて調査を進めた。叩き床の面を検出、Ｂトレンチに焼土を検出、これの精査を進めたところ竈と判明。午後住居跡の全面調査を進める。床面の精査を進めるに従って柱穴の掘方が２ケ所検出された。竈は北壁に発見され、左側に方形のピットがあり、杯が３点出土する。これに続いて棚状の土坦が北壁添いにあり、ここから壺・甕・円筒土器などが発見された。

裏口通路と考えられる遺構が竈の東にあり、この部分はゆるやかに住居内に落ち込んでいる。

西壁に近い柱の掘方付近に杯が５点発見され、壁に立てかけた状態で甑が出土した。

東壁に添って排水溝が検出された。

22日は前日に発見された遺構の精査及び実測を行う。

柱穴は３基検出されたが、いずれも掘方をもち、柱は21cmの角柱であった。これは大玉村の間尺遺跡に例があるもので、出土した土器も同一期の栗囲式のものである。

住居跡の西方に土器の散布の多い地点があったので、新たにトレンチＣ２ｍ×10ｍを設定し、荒掘りを進める。ほぼ中央部に堀形の遺構が発見されたため、この精査を進める。遺構は南北6.5ｍ東西5.5ｍのだ円形であることが確認された。遺物は主として周濠の中から高杯・杯などが出土している。この集落の祭祀に関係のある遺跡と考えられる。

午後今回調査を行った全遺跡の埋戻しを行い、今回の調査の全日程を終了する。

第３章　遺　構

第１節　住　居　跡

本調査によって発見された住居跡は１基のみであったが、外に焼け土の状況などから考えて２基以上の住居跡があったと考えられる。

１号住居跡

平面プランは隅丸方形を呈し、中軸線は南北を指している。

東西6.5ｍ、南北6.5ｍの正方形である。壁は東で25cmと急に下がって床面になっている。西は

50cmほどの段を残して壁は15cmと浅い。南の壁は15cmであるが、北側は竈をほゞ中央に築いてあるため平均約1mの段状の棚を持っている。高さは20cmである。壁は15cmである。

周溝は西側段状遺構に添って掘られているが、他には認められない。

柱穴はだ円形の掘形をもち、その中央部に約21cmの角柱が立てられていた遺構が検出された。(注)今回調査されたものは3ケ所のみであるが、南西部の柱も存在したものと考えられる。

かまどは住居跡の北壁に接して構築されている。

焚口は南にあり巾15cmである。約40cm入ったところに50cm径の火袋があり、煮沸用の埋めがめが2基定置されている。火の通った面は高熱のためガラス状にやけている。煙道の残存は巾12cm長さ40cmである。焚口には左右に一本づつ長瓶が逆に立てて、これを粘土で固めて焚口が構築されていた。

遺物は北側の竈の周辺に多く円筒形土器は壺(1号)の口に立てられた状態で発見された。このほか小形の壺・甕・杯などが集中して発見されている。また北西隅の柱の周辺から壺・杯・鉢等が発見されたのも特筆すべきことであろう。

2　号　住　居

行馬遺跡発見の動機となった遺構である。これを2号住居跡とする。

第2節　だ円形遺構

行馬遺跡の西にあり、泉川の氾濫源を見下ろす崖上にあり、この集落の祭祀的な役割を果たした遺構と推定されるものであろう。

遺構は南北6.5m、東西5.5mのだ円形を呈し、平均巾65cm深さ40cmの濠を廻らしている。中央部に1m×0.5mの浅いピットが検出された。遺物は主として濠の中から発見され、土器は杯・高杯などを主としたものである。

第4章　遺　物

第1節　土　器

今回の調査によって発見された土器は主として1号住居及びだ円形遺構より発見されたものである。

土師器のみで編年は栗囲式に比定されるものと考えられる。

①

壺　－　1

球形をなす体部に外反する口辺をとりつけ、底部は篦削りで整形している。口径14cm・高さ17.5cm、胴部で継いである。口辺は布引きにより仕上げを行っている。色調は淡紅色を呈し、胴下部は手持ちにより篦削りを行い再整形を加えている。底部に近い胴下部に火が当ったと思われる炭化がみられる。

壺　－　2

この壺も球形をなす体部に、やや口辺が立っており、口縁部まで同じである。口縁部の径10.7 *cm* 高さ16*cm*で色調は黄褐色を呈している。口辺から口縁にかけては布引が行われている。胴部は全面にななめの刷毛目をほどこしている。

②

甕　－　1

広口のもので、口縁、径11.8 *cm*・高さ10*cm*・底部 5. 5 *cm*である。色調は外部黒褐色、内部は褐色を呈している。口辺部及口縁部は布引により仕上げてあり、口辺部から口縁部はかるく外返している。頸部から肩部への移行点に一段の稜をつくりだし、胴部は篦削りにより整形し、布引により仕上げを行って、内部も篦削りにより整形している。

甕　－　2

やや深い器体に内傾した短い口縁部があり、これは布引によって仕上げられている。胴部は刷毛目により調整され、色調は外部は黒褐色で、内部は褐色を呈している。底部は篦削りにより丸底に整形されている。口径12*cm*・高さ15*cm*・底部径 7. 5 *cm*

甕　－　3

高さ29.5 *cm*・口縁17 *cm*・底部 7 *cm*

口辺から口縁にゆるく外返し、布引により仕上げられ、肩部に稜がある。胴部は輪積みのあとが残っており、ななめにほどこされた刷毛目がみられる。色調は褐色であり、この甕はカマドの燃焼室にあったもので、胴下部$\frac{2}{3}$にわたり強い火力を受けたため黒色に変色しており、最も強火が当った部分は落剝がみられる。

甕　－　4

高さ29.5 *cm*・口縁17 *cm*・底部 6. 5 *cm*

口縁は口辺からゆるく外返し、布引による仕上げがある。頸部から肩部へ移行点に一段の稜をつくりだしている。胴部の色調は褐色であるが、この甕も竈の燃焼室にあったもので、胴下部に強い火力を受け黒色に変色しており、これも最も強く火を受けた部分は落剝している。

甕　－　5

高さ31*cm*・口縁16*cm*・底部 6 *cm*で、口辺から口縁にかけてかるく外返し、肩部の稜は認められない。色調は褐色で胴部は刷毛目によっている。この甕も胴下部に強い火を受けたもので、黒色の変色があり、最も強く火を受けた部分は赤褐色を呈している。底部に木葉痕がある。

甕　－　6

高さ10.5 *cm*・口縁17*cm*・底部 7 *cm*、口辺から口縁にかけてゆるく外返し、布引により仕上げが行われている。口辺から肩部の移行点に稜線が認められる。胴部は全面に篦による調整が認められる。全体の色調は赤褐色を呈し、一部に炭化物の付着が認められる。

甕　－　7

高さ28*cm*・口縁15.5 *cm*・底部 9 *cm*、口辺から口縁にかけてゆるやかに外返し、布引により仕上げが行われている。この長甕は竈の焚口の芯材として使用されていたものである。

③

甑

1 号住居内より発見されたもので精製土器である。高さ22*cm*・口縁25*cm*・底径 7. 5 *cm*、口辺より口縁にかけて外返し布引を行なっている。頸部より肩へ移行するところに稜線が認められる。胴部は内・外ともたんねんに篦磨きがほどこされている。底部は内側に 7 *cm*の穴があり、 1. 2 *cm*のところに径 0. 5 *cm*の小穴が 3 ケ所にあけられている。

色調は白褐色を呈し、黒色の焼むらが認められる。

④　杯

杯　－　1

口辺部18*cm*・高さ 4. 5 *cm*

杯　－　2

口辺部18*cm*・高さ 4. 6 *cm*

両者はいずれも口辺部と底部の境に明らかな稜を呈し、大きく外返した口辺と丸底の底部をもっている。まき上げ技法で成形し、口辺部外面を布によって横なでを行い、底部外面を篦削り整形し、内面は丁寧に篦磨きしたものである。内面黒色処理を行い、外面の色調は褐色で口辺及び底部に黒斑が認められる。

杯　－　3

口辺部20.5 *cm*・高さ 6 *cm*

口辺部がゆるやかに外返し、口辺部と底部の境に稜線を有し、底部は丸底である。成形・整形及び調整の技法は前例と変わらない。内面は篦磨きのうえ、黒色処理を行い、外面は褐色を呈しているが、口辺及び底部に黒斑が認められる。

杯　－　4

口辺部14*cm*・高さ 4 *cm*

口辺部が外返せず、口辺から底部の移行点に稜を有するもので、底部は丸底である。内面は丁寧に篦磨きが行われ、黒色処理されている。外面の色調は褐色を呈している。

杯　－　5

口辺部17cm・高さ5.5cm

口辺部と底部の境に稜線が認められる。口辺部は外返せず、布による横なでが行われている。底部外面は篦削り整形し丸底とした。内面は丁寧に篦磨きしており、底部も一定方向に篦磨きを行い、黒色処理がされている。色調は褐色を呈し、口辺及び底部の一部に黒斑が認められる。

杯　－　6

粗製土器で変形がはなはだしい。口辺の最長部13cm・最短部11cm・高さ5.5cm。

口辺部は布により横なでを行い、稜はない。底部は篦削りが行われている。内面は口辺に布引が認められるが、底部は篦削りにより整形されている。色調は全体に暗褐色である。

⑤

椀

口辺径19cm・高さ8.4cm

口辺部は内外ともに布により丁寧に調整が行われている。外部口辺より底部へ移行する点に稜線が認められる。底部は手持により篦調整が行われている。

内面黒色処理が行われており、外面の色調は褐色を呈しているが、口辺から底部の一部に黒斑が認められる。

⑥

円筒形土器

高さ15.5cm・径17cmで巻き上げ手法による。色調は黒褐色を呈している。焼成はあまり良くない。胴部は全面に刷毛目による調整が行われている。

第5章　考　　察

第1節　遺　　構

行馬遺跡は奈良時代の集落跡である。今回の調査は主として1号住居及びだ円形遺構を主として行った。

1号住居は方形のプランを持つ竪穴住居で、竈は北壁中央に設置されており、西側が段状を呈し、ここに土器が多く検出された。

柱穴はだ円形の掘り方があり、21cm（7寸）角の角柱であったようである。これはこの時期としては特殊な例と考えられるが、昭和49年に小滝利意氏によって調査された安達郡大玉村間尺遺跡にも径30cmの掘り方に21cmの角柱が検出されている。竈は北壁に接し、煙道は壁の外に出ており、排煙する施設があったようである。焚口は長甕を逆に立て芯材としてこれに粘土を叩いて構築されている。燃焼室は径50cmの火袋があり、煮沸用の長甕が2基あるが、胴部がふくらんでいるものを用いている。この長甕は基部粘土によって叩き固定されている。この基部は高熱のためガラス状に焼

け固まって検出されている。栗囲期の竈の一例と考えられるものである。

だ円形遺構

行馬集落遺跡の西崖に接して、だ円形の遺構が発見され、この遺構は南北6.5m、東西5.5mのだ円形に地山を掘り、巾65cmの周濠を廻らしたもので、濠内から高杯・杯など祭祀に関係のあると考えられる遺物が出土している。

この場所は泉川の氾濫原を見下ろし、遠く那須火山、奥羽山脈の山々、磐梯・安達太良を望み、関和久遺跡のある烏峠を望むことが出来る。

中畑地区の栗囲期の遺跡は行馬遺跡のほか、森郭、下荒具A、下荒具B遺跡、それにかに沢遺跡などがあり、直刀・鉄鏃・下げ砥をはじめ多数の墨書土器などが発掘されている。

遺　　物

杯はいずれも内面が黒色処理が行われ、口辺から底部への移行点に稜を有している。甕は口縁が外返するものは高さ30cm前後の長甕で、いずれも口辺から肩部への移行点に稜を有するものである。このうち胴部中央に最大径を持つ甕（3号・6号）は煮沸用として固定されていたものである。これとセットになる甑は径の大きな単孔のものが使用されていた。

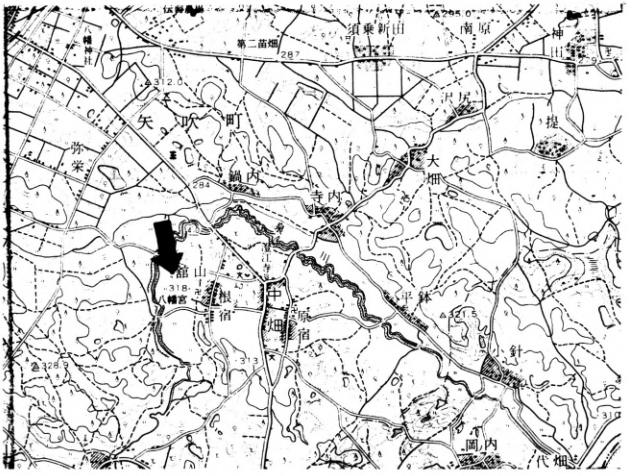
行馬遺跡は栗囲期の土器のみが発見されているが、森郭、下荒具A・B遺跡は9世紀頃までの土器が発見されているところから、長期にわたり生活が営まれたことが考えられる。

総　　括

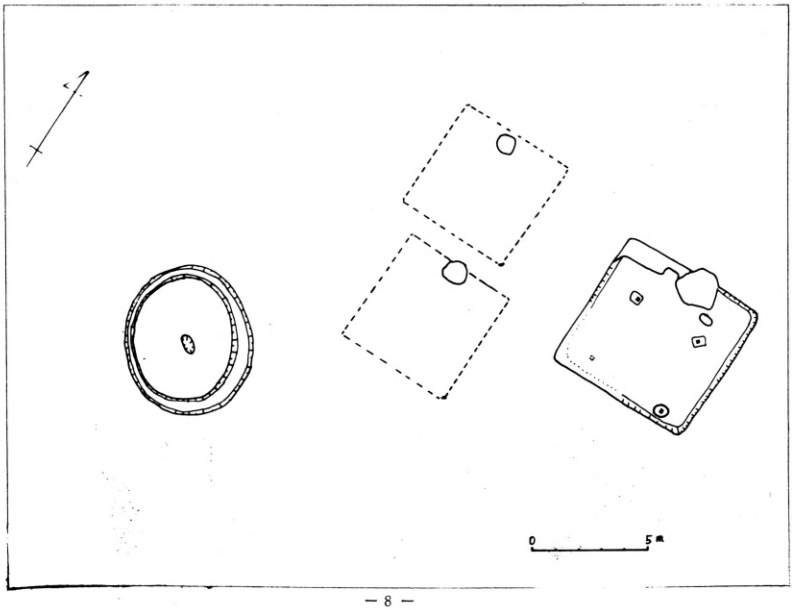
行馬遺跡のある中畑地区は「和名抄」に記載の白川郡17郷のうち松戸郷と想定される地域である。白川郡の中心地と考えられる関和久へは5～6Kmの地点にあり、白川軍団などとも密接な関係を持つ遺跡であったようである。

永　山　倉　造

中畑行馬遺跡位置図

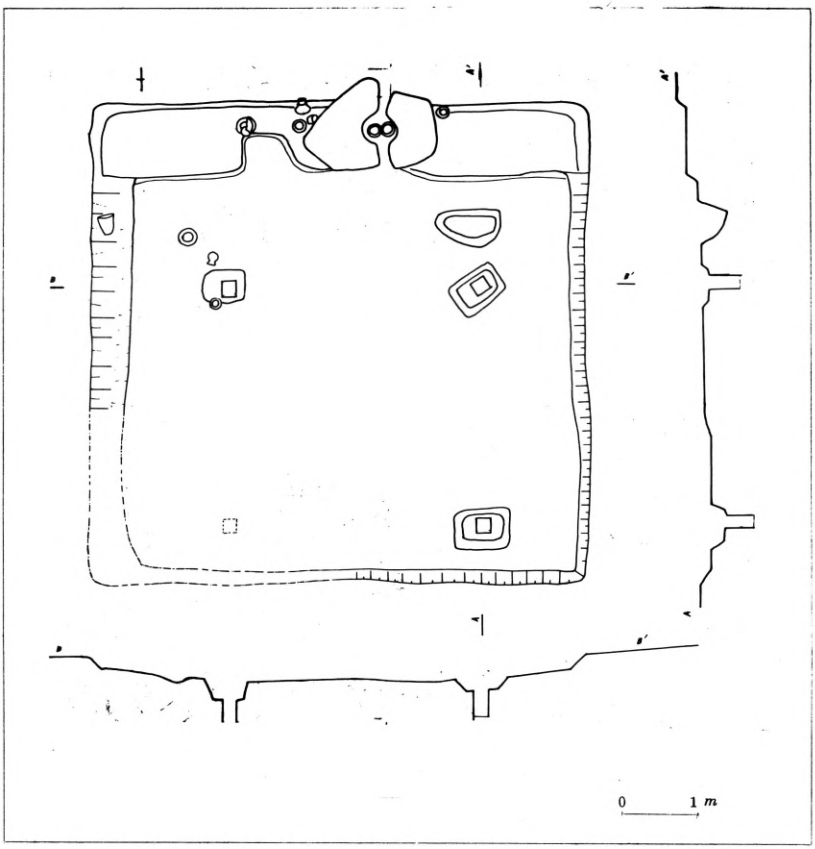


中畑行馬遺跡遺構配置図

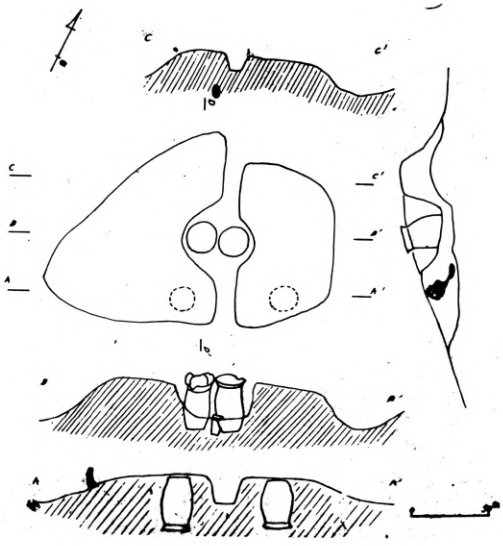


遺　　構

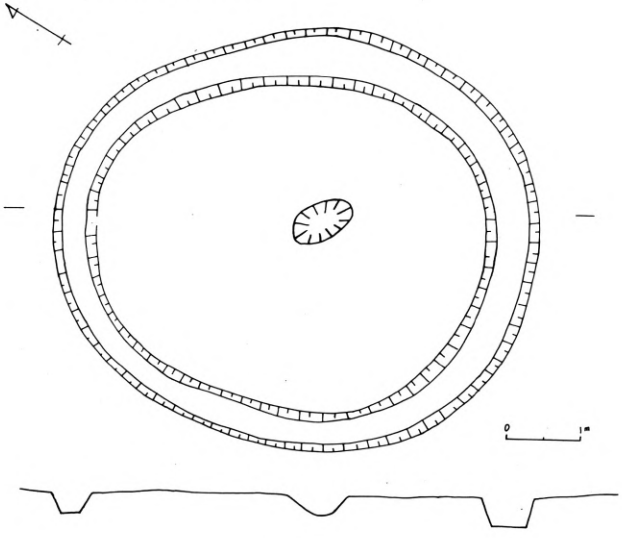
1号住居跡実測図



一号住居竈実測図

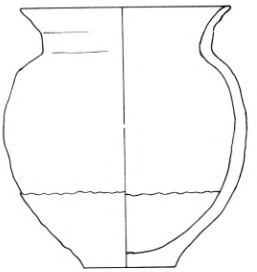


だ円形遺構実測図

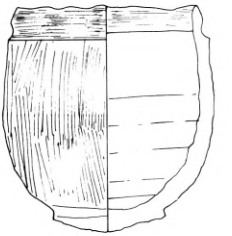


遺　物

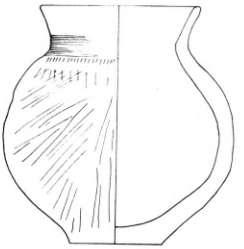
壺 － 1



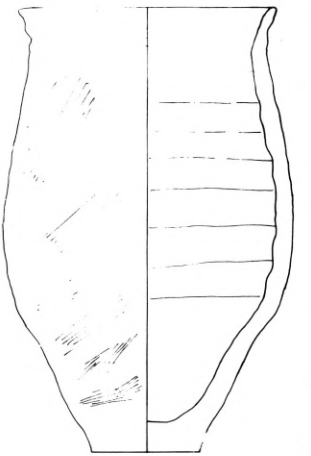
甕 － 2



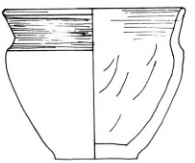
壺 － 2



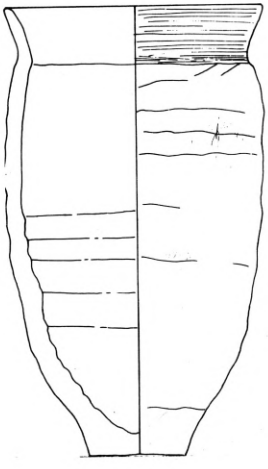
甕 － 3



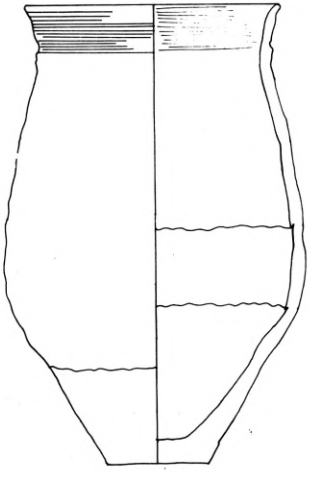
甕 － 1



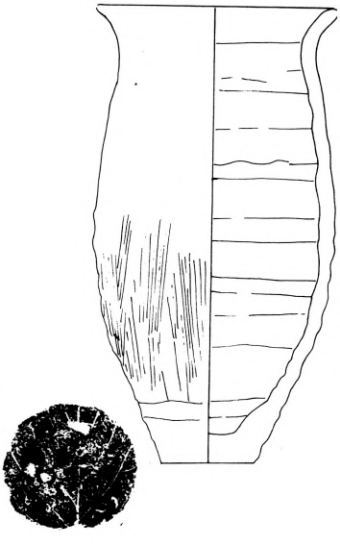
甕 － 4



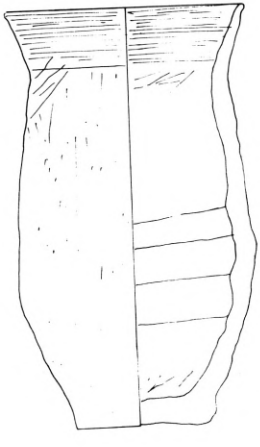
甕 － 6



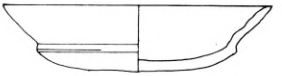
甕 － 5



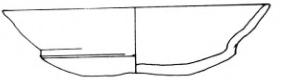
甕 － 7



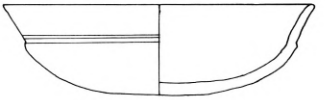
杯 － 1



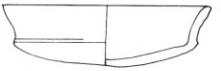
杯 － 2



杯 － 3

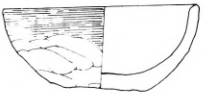


杯 － 4

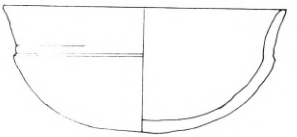


杯 － 5

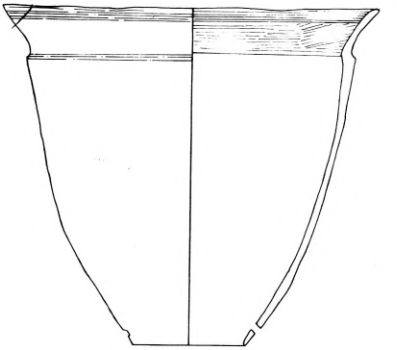
杯 － 6



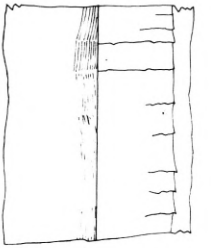
椀

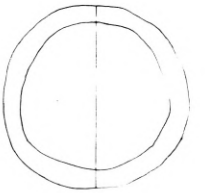


甑



円筒形土器



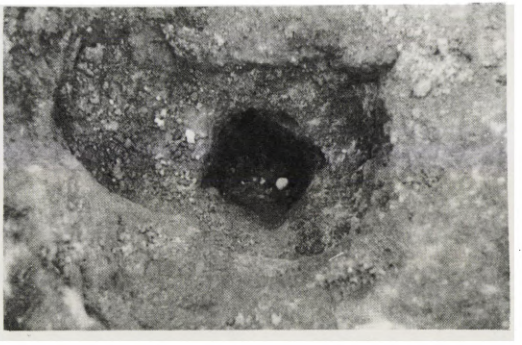


写　　真

中畑根宿の行馬遺跡全景　観音山城を望む

1 号 住 居 跡

角柱柱穴



かまどの中に据えられた煮沸用長甕

行馬遺跡だ円形遺構　周濠の中から高杯が出土している

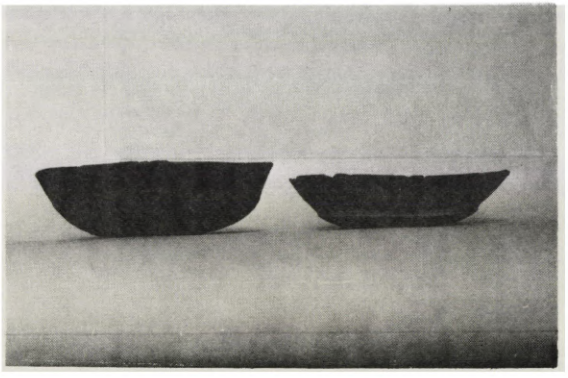
壺 1 (2)

甕 1 (1)

甕 1 (7)

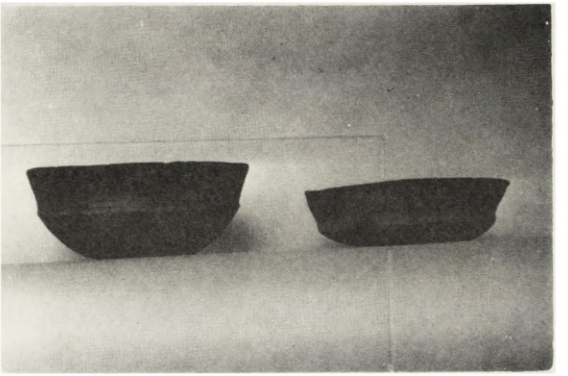
甕 1 (3)

杯 1 (3)



杯 1 (1)

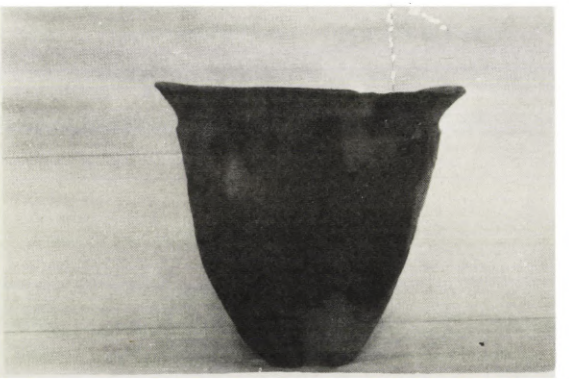
椀



杯
1
(5)

(杯
1
6

円
形
土
器



甑

矢吹町文化財調査報告書第２集

中　畑　行　馬　遺　跡

印刷年月日　昭和５０年１２月１日
発行年月日　昭和５０年１２月１０日

発　行　者　矢吹町教育委員会
　　教育長　小林重孝

発　行　所　矢吹町教育委員会事務局